

# 実習経過と看護学生のエゴグラム

—Free Childの低下傾向—

桑 名 行 雄

宮城大学看護学部

## キーワード

看護学生、臨床実習、エゴグラム、精神的健康  
nursing student, clinical practice, Egograms, mental health

## 要 旨

性格特性と状況が表現されていると考えられるエゴグラムを用いて、看護短期大学の3年生105名を対象に、臨床実習の経過と自我状態の関連を検討した。多変量解析による分析を行った結果、実習経過に伴いFCの自我状態が低下する傾向が示された。対象とした学生には、看護者として主体的・創造的人間関係を展開するために必要な創造性・好奇心の源であり、精神的健康と関連が深いFCの自我状態が、継続的な看護実習によって影響を受けやすい傾向が認められた。学生がゆとりをもてる実習を計画し、実習担当の教員の一役割として、教員自身が柔軟な思考や感受性をもったかかわりが必要であることが示唆された。

Practice Transition and Egograms of Nursing Students

Yukio Kuwana

Miyagi University School of Nursing

## Abstract

This report examines how the ego state of clinical nursing students changes during clinical training. One hundred and five third year nursing college students participated as subjects in this study. The Egogram scores of each subject were collected and analyzed by means of multivariate analysis.

Analysis of the data revealed a relation between the subject's FC ego state and their clinical practice. More specifically, there appears to be a direct correlation between the duration of the clinical training of students and their mental state. The analysis of the data suggested that it is important for educators of clinical nursing students to have the capacity to be attentive to the individual mental states and changes of their students.

## I. はじめに

講義や演習で得た知識・技術を確認し、さらに発展・統合するために看護学生は臨地実習を経験する。特に病院実習の時期は、不安と期待の混在に始まり、患者の理解、日々の計画立案や実践、記録、臨床指導者や教員、実習メンバーとの関係に、精神的身体的に多くのエネルギーを要しているようである。

一方、実習にかかわる教員は、学生がどのくらい実習目標に到達しているかといった学びの視点からかかわることが多く、実習を休んだ学生を前にして、初めて学生のこころの状態を知り、対応などに苦慮することがある。特に2年次や3年次に行われる専門領域の実習に際しては、継続的に数ヶ月間行われることが多く、実習の経過に伴い学生に何らかの心身的な変化が生じていることを経験する教員は少なくないと考える。教員は、実習そのものの過程や展開に加え、実習をしているその人のこころの健康にも焦点を当てる必要がある。

学生個々の内面に焦点を当てる方法のひとつに、エゴグラムの活用がある。エゴグラムは、交流分析という三つのこころの働き(親的、大人の、子供の)をもとに、自我状態のエネルギーの負荷量を5つの尺度(批判的親:CP、養育的親:NP、大人:A、自由な子供:FC、順応的子供:AC)を用いて数量化したものである。Dusay(1977)<sup>1)</sup>が考案した際は、直感による判断でつくられていたが、その後、客観性の高いエゴグラムの研究が進められており、個人の性格特性と状況が表現されていると考えられている。

エゴグラムの5つの自我状態の中で、心身の健康との関わりが大きいのはFC(Free Child)といわれている。FCは直感的な感覚や創造性の基礎であり、他者との交流や開放的な態度、自己の人間性を素直に表現する要素である。FCの低い人は、感情表出が乏しく物事を楽しめないといわれる。抑鬱状態、不安神経症、心気症などの患者のFCは、健常者群と比較して有意に低いという報告<sup>2)</sup>もある。

長期間の看護実習にかかわる中で、身体的な不調を理由とした遅刻や欠席をしたり、他の学生と交流が少なくなり、活気が見られなくなる学生達を見受けることがある。実習に関することだけでない様々な要因があると考えられるが、実習を中心とした生活を重ねる中で、多くの学生に心身の健康と関わりが深いFCの低下傾向があると推測する。

これまで筆者は西岡<sup>4)</sup>と、看護学生個々のエゴグラム総得点が高いほど、グループの中でリーダーシップをとる傾向があることを示してきたが、本論では、実習経過に伴い学生のこころの状態が変化し、エゴグラムに反映されるという仮定のもとに、実習経過と看護学生の自我状態の関連について、特にFCに焦点を当て検討を試みる。

## II. 対象

対象は、M看護短期大学3年生で、平成6年5月～11月の実習期間中の105名(15グループ)。

## III. 方法

エゴグラムチェックリスト<sup>6)</sup>を用い、自我状態のエネルギーの負荷量を五つの尺度—批判的な親:Critical Parent(以下CPとする)、保護的な親:Nuturing Parent(以下NPとする)、大人:Adult(以下Aとする)、自由な子供:Free Child(以下FCとする)、順応した子供:Adapted Child(以下ACとする)の各10問の設問に対して、それぞれ、該当する(3点)どちらとも(2点)、該当しない(1点)として得点化した。

実習が同一時期に5つの専門領域に分かれローテーションにより行われるため、特定の一専門領域で実習する3グループずつを対象にし、5回に分け全15グループ(105名)の学生にエゴグラムを施行した。実習時期は5区分(1, 2, 3, 4, 5)され、1が初回実習前、2が2回目の実習前、3が3回目の実習前、4が夏期休業後で4回目の実習前、5が最後の実習前となる。集計・分析にはSPSS7.5及びHALBAU4を用いて行った。主な解析の手順は以下の通りである

### 実習時期と自我状態の関連

1. 各実習時期を識別するのにどの自我状態が影響しているかを把握するため、自我状態の得点を説明変数、時期を基準変数として、判別分析を用いて検討した。
2. エゴグラム各自我状態の得点を基準変数、時期を説明変数として、一元配置分散分析及び対比較を行い、実習時期毎の各自我状態の平均値を比較し検定した。

#### IV. 結 果

##### 1. 対象者の全体的なプロフィール

対象とした学生105名のエゴグラムについての全体平均は、表1に示す通りとなり、NPが高く、次いでAC、FC、Aで、CPが最低値を示した。各自我状態のピアソンの積率相関係数は、NPとAに0.54、CPとAに0.403、NPとFCに0.347、CPとNPに0.301となり、1%水準で有意であった。また、CPとACの相関係数は0.249で、5%水準で有意であった(表2)。

表1. エゴグラム全体平均

N=105				
	平均値	標準偏差	最小値	最大値
CP	12.9714	3.6227	5	22
NP	19.4190	4.3979	7	29
A	15.9429	3.7566	5	27
FC	16.1429	4.5222	5	28
AC	16.3143	3.9959	5	27

表2. 相関係数

	CP	NP	A	FC
NP	0.301 **			
A	0.403 *	0.540 **		
FC	0.162	0.347 **	0.173	
AC	0.249 *	0.117	-0.072	0.06

\*\* 5%水準で有意 \* 1%水準で有意

末松ら<sup>5)</sup>のエゴグラムパターン分類を参考にしてみた対象学生は、健康で明るく協調性豊かな自己共存タイプ(NP優位型)18名(17%)、頼まれたことは「イヤ」と言えず、自分が世話をしないと気がすまない世話やきタイプ(N型FC低位)17名(16%)、活動の中で皆と楽しむことはほとんどなく、世話をすることで満足を得ようとする自己満足タイプ(台形型highNP・A)11名(10.5%)の順に多く、次いで、明るく自由奔放で何事も感覚的に処理し、自分自身を見つめるのが苦手な自己中心タイプ(FC優位型)8名(7.6%)、自分にも他人にも厳しさはなく、物事が思い通りに運ばなくても仕方がないと思えるルーズタイプ(CP低位型)7名(6.7%)、無批判に頼まれたこと命令されたことを必死に頑張るお人好しタイプ(N型A低位)7名(6.7%)、マイホームタイプの台形型、周囲からの指示待ちタイプ(AC優位型)7名(6.7%)、その他12タイプで14名(11.4%)であった。

##### 2. 実習時期と自我状態との関連

実習時期別にみた自我状態の平均値は表3、図1に示す。実習時期(1~5)を識別するのにどの自我状態が影響しているかを把握するために判別分析を行った。正準判別変量についての有意性の検定では、バートレットのカイ2乗値21.597(20)、 $p=0.363$ 、正準相関係数0.372となり、有意な関数は得ることはできなかったが、影響の

表3. 実習時期別の自我状態の平均値

時 期		CP	NP	A	FC	AC
1	平均値	12.8095	19.7143	15.4762	16.8571	15.0952
	N	21	21	21	21	21
	標準偏差	4.0696	4.14901	3.3259	3.9533	4.0113
2	平均値	13.1429	18.3810	14.9048	17.4762	17.4286
	N	21	21	21	21	21
	標準偏差	3.3806	4.3986	3.4915	4.6542	3.6684
3	平均値	13.0000	19.5238	16.9524	13.9048	16.4762
	N	21	21	21	21	21
	標準偏差	3.2094	4.0573	3.1855	3.8458	4.3774
4	平均値	13.2000	20.3500	16.7500	16.1500	16.8000
	N	20	20	20	20	20
	標準偏差	3.4883	4.5454	3.6110	5.4895	4.5837
5	平均値	12.7273	19.1818	15.6818	16.3182	15.8182
	N	22	22	22	22	22
	標準偏差	4.1654	4.9535	4.8244	4.1333	3.2313
合 計	平均値	12.9714	19.4190	15.9429	16.1429	16.3143
	N	105	105	105	105	105
	標準偏差	3.6227	4.3979	3.7566	4.5222	3.9959

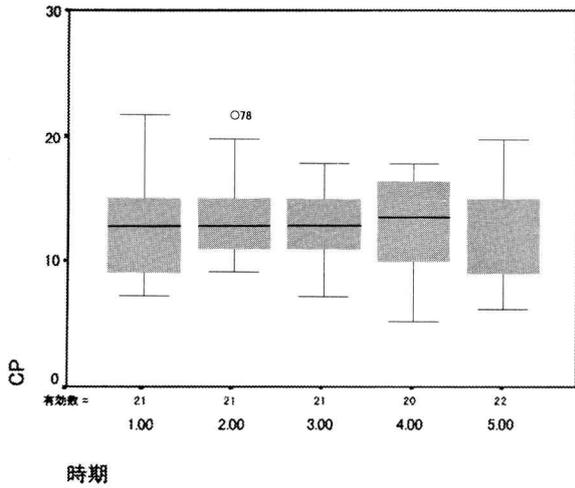


図1-1 実習時期別の自我状態 (CP)

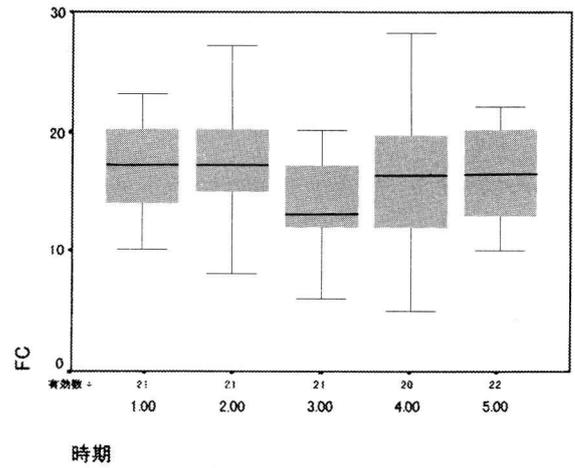


図1-4 実習時期別の自我状態 (FC)

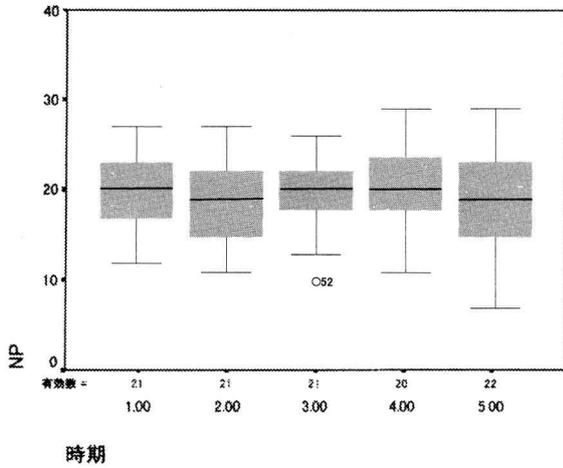


図1-2 実習時期別の自我状態 (NP)

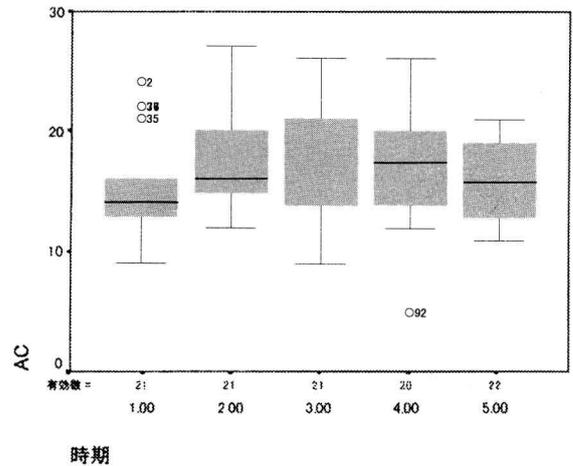


図1-5 実習時期別の自我状態 (AC)

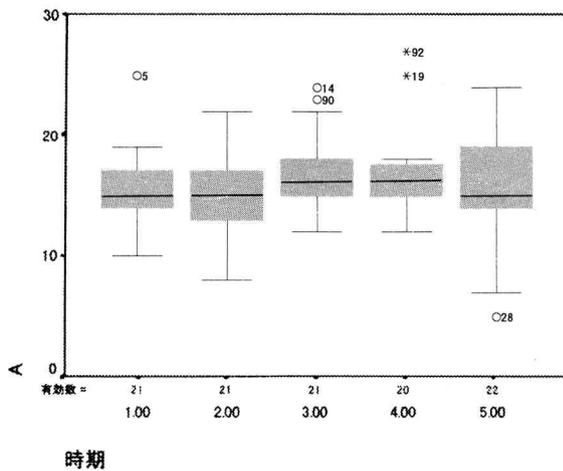


図1-3 実習時期別の自我状態 (A)

程度を示す標準化判別係数CP (0.222)、NP (0.220)、A (-0.700)、FC (0.893)、AC (-0.137) から、判別変量に対して相対的に寄与が大きい変数はFC、Aであった。また、夏期休業の影響を考慮し、実習時期1から3までを対象に分析を行った結果では、有意な判別関数が得られた(パートレットのカイ2乗値21.313(10)、 $p = 0.019$ 、正準相関係数0.500)。得られた判別関数の見かけ的中率は53.968%であった。判別分析に用いた説明変数の有意性ではFCが、F値4.406 (2.60)、 $P = 0.016$ と唯一有意な変数となり、標準化判別係数は、CP (0.223)、NP (-0.324)、A (-0.698)、FC (0.952)、AC (-0.025) と、FCが判別に大きく寄与することが認められた。

また、判別空間における各群の重心は、時期1 (0.198)、時期2(0.569)、時期3(-0.767)であった。すなわち、FCの得点が低いほど負になることから、FCの得点が低い学生は、時期3に判別される傾向があると認められた。

各自我状態の得点を基準変数、時期を説明変数として一元配置分散分析及び対比較をした結果、CP (F値0.065、自由度4,100、 $p=0.992$ )、NP (F値0.549、自由度4,100、 $p=0.700$ )、A (F値1.124、自由度4,100、 $p=0.350$ )、FC(F値1.950、自由度4,100、 $p=0.108$ )、AC (F値1.067、自由度4,100、 $p=0.377$ )となり、実習時期毎の自我状態の平均値間に有意な差は認められなかった。そこで、夏期休業の影響を考え、実習時期1から3までを対象に分析を行った結果、F値=4.406、自由度(2,60)、 $p=0.016$ となり、5%水準でFCに有意な差が認められた(表4)。また、対比較の結果は、F値=3.857(2,60)、 $p=0.027$ となり、5%水準で実習時期2と3との間に有意な差が認められた。

表4. 時期1～3を対象にした平均の差の検定

	Wilks のラムダ	F値	自由度1	自由度2	有意確率
CP	0.998	0.046	2	60	0.955
NP	0.980	0.618	2	60	0.542
A	0.934	2.106	2	60	0.131
FC	0.872	4.406	2	60	0.016
AC	0.944	1.780	2	60	0.177

## V. 考 察

本研究で対象とした学生のエゴグラムは、得点の平均値から見ると、「相手を認める」「共感する」「保護・育成する」「同情する」といったNP (Nurturing parent) の自我状態が優位となっている。子どもの成長を促すような母親的な部分が高く、これまで報告<sup>6)7)8)</sup>された看護学生を対象にしたエゴグラムの全体平均と共通する結果である。相関からみた自我状態は、AとCP、AとNPに関連が認められ、現実を吟味し判断して対処できる能力の高さに応じて、規範的・批判的能力や保護的に関われる能力を持つ傾向を示している。僅かであるがACとAに負の相関がみられ、「理性的で合理性を尊ぶ大人の」学生と、「従順でいい子」の学生の二層に分かれる傾向

が見てとれる。また、学生個人に焦点を当てた場合、今回の調査対象の学生はNP優位型・台形型が多い。健康な一般女性を対象にした調査に見られる結果(N型・逆N型・平坦型が多い)<sup>9)</sup>と比べても、一般女性が、周囲の要求に黙々と従うタイプ(N型)、意見を主張し自己中心的タイプ(逆N型)、何事にも中庸で対処するタイプ(平坦型)に対して、対象とした学生の半数が保護・育成的である特徴を有し、看護実習に対しての取り組みは積極的なものと考えられる。

実習時期を自我状態の得点から識別するための判別分析では、有意な関数は得ることができなかった。しかし、標準化判別係数から、FC、Aの順に判別への寄与傾向が認められた。また、実習時期1から3を対象にして有意な判別関数を得た結果からは、誤判別率が40%を越えており高い弁別力はないが、2回の実習を経た実習時期3がFCの得点に何らかの影響を与えていると考えられる。学生は実習だけでなく、日常生活や対人関係など様々な外在的要因に影響を受けることは推測できる。しかし、看護学生にとって臨床実習がストレスの大きな要因であり、教員や臨床指導者との関係で自分が傷つかないように自分を押しさえ、迎合する傾向がある<sup>10)</sup>ことから、実習を重ねることで豊かな感情表出と関連するFCに変化を及ぼすと考えられる。

実習時期毎の自我状態の平均値間では、全実習時期を通してみたところ有意な差が認められなかったが、実習時期1～3までを対象にした分析によると5%水準でFCに有意な差が認められた。また、対比較では5%水準で時期2と3に差がある結果となった。実習を2回経験した時期3のFCは、実習を1回終えた実習時期1のFCより低いということになる。実習を2クール終えた状態でFCの減少傾向を示唆すると考えられる。夏期休業以降を対象外とした結果ではあるが、実習経過と共にFCが減少する傾向や可能性を示唆するものと考えられる。

看護の専門領域を順次の実習するに際しては、その領域の特徴的な疾患に対する知識や技術が必要であり、積極的に真面目な学生でなくとも日常生活の多くを「看護」に費やすことになる。調査対象の学生に限らず、臨床実習を経験する多くの看護学生に不安やストレスが生じ、勉学や日常生活に変化や影響を及ぼしているという報告は多い<sup>11)12)13)</sup>。

実習担当教員の指導やアドバイス、そして、学生

個々による様々な方法や手段を講じての対処行動によって、学生は実習をなんとか乗り越えているといった現状であると考えられる。

調査対象とした学生には、AとNPの相関(0.54)にみれるように、現実を吟味し判断して対処できる能力(A)と人格形成の基盤となる信頼感を育てる能力(NP)は認められた。しかし、看護者として自律性を持ち、主体的・創造的人間関係を展開するための創造性・好奇心の源であり、豊かな感情や表現力(FC)が継続的な看護実習によって影響を受けやすい傾向があると考えられた。

最後に、この研究においてはいくつかの課題が残されている。一つは、同一被験者の実習経過による変化をみるといった縦断的方法による実証を行っていないことがあげられる。このため、実習経過段階に対応する人数が20数名と少なく、統計解析上の妥当性に課題があると考えられる。また、夏期休業など実習しない時期の影響について検討していない。今後、対象者を広げ研究方法を吟味して追試することを行っていきたい。

## VI. おわりに

性格特性と状況が表現されていると考えられるエゴグラムを用いて、看護学生の実習経過と自我状態の関連を検討した。看護実習の経過に伴い、精神的健康に関連があるといわれているFCに低下傾向があることが示唆された。

一般の看護学生にも同様な傾向があるとすれば、看護実習に関わる教員の役割が一つ明確になると思える。少なくとも教員自身が柔軟な思考や豊かな感受性を持ち、学生に関わる必要がある。そして、学生にとって実習が辛く大変なことだけでなく、楽しいこと嬉しいこともあるんだという感じをもてるように、また、それを表現できるような関わりが求められる。また、長期の実習には学生がゆとりを持てるインターバルが必要と思われた。

## 文 献

- 1) John M. Dusay : Egograms : How I See You And See Me. Harper & Row, 1977 (池見西次郎監修、新里里 春訳 : エゴグラム、創元社)
- 2) 大島京子、堀江はるみ、吉内一浩、志村翠、野村忍、和田迪子、俵里英子、中尾睦宏、久保木富 房、末松弘行 : 東大式エゴグラム (TEG) 第2版の臨床的応用— TEGパターン分析および多変量解析を用いた健常者群と患者群の比較、心身医学、第36巻第4号、316-324、1996
- 3) 西岡和代、桑名行雄 : 課題達成に見られるグループと個人の傾向、日本精神保健看護学会第4回学術集会抄録集、37-38、1995
- 4) 杉田峰康 : 交流分析のすすめ—人間関係に悩むあなたへ—、日本文化科学社、38-41、1990
- 5) 末松弘行、和田迪子、野村忍 : エゴグラム・パターン—TEG東大式エゴグラムによる性格分析、金子書房、1989
- 6) 小河育恵、掛橋千賀子 : 臨床実習におけるグループ編成にかんする—考察—エゴグラムの活用を試みて—、第24回日本看護学会集録 (看護教育)、1-6(2)、1993
- 7) 川端寿美子、館瓊子、佐々木泰子、鈴木妙 : 看護学生のエゴグラムにみる各学年の指導のポイント、看護展望、11(9) : 70-73、1988
- 8) 上山悦代、村山由子、高島恵子、関野房子、中野裕子、小山珠美、大橋富士子、東本トシエ : 基礎実習前・後のエゴグラムにみる個別指導のあり方の一考察、第23回日本看護学会集録 (看護教育)、1-6(1) : 12-15、1992
- 9) 前掲 2)
- 10) 土屋八千代 : 看護学生のストレスとコーピング—ストレス分布とコーピングの学年比較—、第22回日本看護学会集録 (看護教育)、1-5(1) : 31-34、1992
- 11) 篠田道子 : 看護学生の臨床実習におけるストレス認知とコーピング、第22回日本看護学会集録 (看護教育)、1-4(1) : 28-31、1991
- 12) 渡辺京美、遠藤英子 : 長期臨床実習における不安の変化(2)—STAIにおける高群・低群学生の特性—、第22回日本看護学会集録 (看護教育)、1-8(2)、41-44、1992
- 13) 三浦麗子、伊藤暁子 : 臨床実習の対人関係が学生に及ぼす心理的影響とその対処行動、第22回日本看護学会集録 (看護教育)、1-9(2) : 45-48、1992